か　わ　ら　版

（新春号 NO14 号）2018/01/01 発行

年二回発行(1・7 月)

下関市立大学落語研究会ＯＢ会発行

大学同窓会のご厚意により創刊号（ＮＯ１）よりすべて閲覧できます。大学 OB の皆様にもお読みいただければ幸いです。

編集長　　西川　隆喜

三友の友と呼ばれし松竹梅

春の訪れ耐へ忍ぶなり　　(NO 8.016)

(直訳）極寒の中、緑を保つ松と竹、植物の中で最も早く花を咲かせる梅は日本人に三友のして好まれました。節操を曲げない士人の精神を表しています。そして、春の訪れを待つ忍耐力を示しています。

瑠璃光寺五重塔　　(山口市)

下関市考古博物館　（下関市　綾羅木）

『謹賀新年』

下関市立大学落語研究会 OB・OG の皆さま、本年もご家族皆々さまと新年を迎えることができ嬉しく存じます。

昨年の日本は、節度のない政治家や薬物使用で捕まった多くの芸能人、スポーツ界はもとより教育界における破廉恥行為、優良企業のデーターの改算など、語るに落ちた日本を海外にも露呈してしまいました。とりわけ、年末に発生した JR 新幹線で起こった事案はとても

残念に感じた次第です。これらの根っこにあるものは、総じて戦後 73 年間の教育体制と内容の不備の負の連鎖にほかならないと編集長は感じています。民生・児童福祉委員をさせていただいている関係もあり、近隣にある桃山学院大学の副学長で社会学部の石田易司氏や元大阪大学教授・東亜大学学長もされていた文化功労者の山崎正和氏との会話の中で気になったところがあり、OB・OG の皆さんにもお伝えします。社会学者の山崎さんは実際の講義やゼミにおいて、学生の平均的な知的学力が低下していることを指摘されています。特に新聞を読みことがほとんどなくなったため、現社会で問題になっている事柄に付き、自分なりに調べ、考えてみるといったことができなくなっているということらしいです。文科省の指導要綱においても、初等教育から「生きる力」を養うための「課題の発見と解決に向けての、主体的、協働的に学ぶ学習(いわゆるアクティブ・ラーニング)」を経験させることを指摘していますが、最高学府の大学でさえ、学生=お客様である学生へのサービスとしてこのような指導展開をされているようです。母校においても原則、土曜日は講義がない訳ですから以前と比べ時間数も減少している中での先生方の苦労が頭に浮かびます。

そして、山崎氏は今話題の高等教育無償化についての話の中でで、政府が言うところの「意欲と能力がありながら、家庭の経済的事情で進学を断念する若者を可能な限りなくしたい」は一面正論である。しかしながら、一方、現実の高校・大学を見ていると、どちらも学問にあまり興味はなく、世間の空気に乗せられて進学する者が多数存在すると言われています。初等・中等教育においても授業時間の減少により、本来、国民共通の教養すら身についていない中で、政府のこの考え方は明らかに疑問である・・・。日本の小・中学校には卒業試験も留年制度もなく、授業内容の半分も理解していなくとも上級学校に進学でき、とがめられることもない。勉強が好きになるかどうかは幼児期の環境により決定づけられることを考えれば、まずは義務教育期とそれ以前の家庭教育期にこそ国の資金を投入すべきではなかろうかというご意見であった。

編集長も概ね両氏のこのご意見は傾聴するに値するものと考えています。21 世紀を支えてくれる日本人のバランスの良い知育・徳育・体育の向上が望まれます。そして、「高学歴低能力」は何の意味も持たないことを肝に銘じたいものです。　　**(編集局)**

『６円の飛行機で日本１周、還暦二人旅　番番番外編』

朗志との二人旅はいつも、まともな始まり方をしない。今回も出かける予定ではなかった、しかし旅の始まりはまた一本の電話からだった、『もしもし西川です』『ピーチくんどないしたん』『先輩バニラ航空の安いセールで東京までとりましたので、東京から夜行バスでどこかに行こうと思います。』『そうか良かったなあ』で電話を切れば良かったのですが、小生 5 月から末の娘が出産のために実家に帰っており。出産後は子守爺さんをやっていたので 9 月まで旅行にも行けずウズウズしていたので、『ええなあ俺も行こうかなあ』とつい言ってし

まいました。仙台あたりにでも行ってみようかと軽い気持ちだったのですが、なんとどうせなら雪の青森に行きませんかということになり、トントン表紙に話がまとまり、**往復夜行バスホテル泊なし**の雪中行軍をしようかと歳も考えずに恐ろしい行程が形になってきました。そんな折たまたまバニラ航空のセールがあり東京―函館線が安く手に入りましたので、東京から函館に飛んで青函フェリーで青森に渡り弘前からバスで東京へ帰ろうと多少タイトなスケジュールですが、片道は飛行機でと、2 泊 3 日船中泊、車中泊のホテル宿泊なしという行程で行くことになり、あとは小生の東京往復のセールを待つだけとなっていました。

しかしこのまま、すんなりといかないところが、この二人の珍道中の真骨頂でありまして、１０月の中頃にまた朗志からメールがあり『先輩、今度はジェットスターから**６円**のキャンペーンがありますよ』と**たわけたこと**を言ってきました。アホかだれが６円で飛行機を売るか。**って、ほんまにあった**。本当にジェットスターのホームページに出ていたのです。実は１ヶ月くらい前にチャーハンキャンペーンというのがあって４７０円でセールがあり、ちょうど嫁さんと長野に行くことがあって、チャレンジして２席確保したのですが、最後にカード番号の入力で間違ってしまいやり直している間に売り切れとなってしまいました。悔しくて悔しくて、夜も眠れないほどでした。そんなことがあったので今度は絶対にとってやると鼻息も荒く時報とともにエンター・キーを押し、カード番号の入力ミスのないように事前に、シュミ・レーションをして、なんと**６円でゲット**。これで単価を下げることが出来ました。東急観光時代の青山ちゃん往年のゴールドハンドはいまだ健在でした。よく下関支店で指定席の売り出しをやったものなあ、懐かしいなあ。青山ちゃんならわかるよなあこの快感。寄席で一席やって受けて高座を降りるときのあの快感に似ているよなあ。鶴を出世させて気がつかなかった人も、あの時この快感だけは味わえたと思います。大変だったのはこの後です。無理やり**札幌―――名古屋便**を付け足したのですから、行程がしっちゃかめっちゃかに成ってしまいました。

さて、**まくら**はこのへんで実際の旅行はといいますと・・・・・・、１２月１２日の朝、新幹線で博多へ地下鉄にのり福岡空港へ、少し雪が降っていましたが若干の遅れで成田へ。東京の天気は晴れで名古屋あたりから成田まで雪を頂いた富士山が綺麗に見えており、久しぶりに富士山を堪能しました。千葉県の人も富士山が見れるのだと、初めて知りました。これまで何度も成田へ来ましたが全然気づきませんでした。さて、小生は第１ターミナルに着いたので連絡バスで朗志の待つ第３ターミナルへ向かいます。無事合流を果たし、時間があったので暫く休憩をした後、昼飯を食べようとフード・コートへ行き、二人して大好きなちゃんぽんを食べていると英語のアナウンスで、雪と暴風雨のため函館便はキャンセル・・・とか言っているのが聞こえてきた、なんやと思っているとしばらくして、今度は日本語でハッキリと１４時３０分発の函館便は本日、欠航となりますというアナウンスがあり、『結構なことやなあ』と言うてる場合やないと、急いで食べ終えカウンターへ行き払い戻しの手続きの確認をして、取り敢えず東京駅の JR バスセンターへ行こうということで、バスで東京駅へ向かい、青森行きの夜行バスを聞くと 22 時 30 分発のバスがあり、急遽、夜行バスで青

森へ行くことにしました。

時間は午後 3 時 30 過ぎ、金艶に電話すると『今からそっち行くわ』との返事えッ仕事中やないの、とこちらの心配もよそにフラっと現れました。流石に金ちゃんは友達がいのある人です、それから 3 人で８時頃まで居酒屋で大盛り上がり、少し酔の回った金ちゃんとの落研 OB 三人組の師走の忘年会を終え、我々は車上の人となりました。途中、雪の為、高速道路が通行止めになっているところもあり、１１時間かけて翌朝９時半に青森駅に無事到着。一面の銀世界、この景色が見たかったんや西日本の太平洋側に住んでいる人はこの雪景色に感動します、しかも今年の降り始めの雪だから真っ白で街中が白い真綿に包まれているようです。

青森駅、駅近のねぶたの家ワ・ラッセ

ねぶたの家ワ・ラッセへ。青森ねぶた祭りに出陣した大型ねぶたが展示してあります、こんなものが本当に練り歩くのかと思うほどでかいです。いつか祭り本番に来てみたいと、思わずにはいられませんでした。そのあとは、これもすぐ近くの青森まちなか温泉へ。バスでもらったセット券でタオル･バスタオル付きで 500 円で入浴できる、お得な温泉でサッパリしてストーブ列車へのることに、、津軽五所川原ら津軽鉄道でストーブ列車に乗り太宰治ふるさと金木町へとう。ストーブ列車の中は 15 名くらいの台湾のグループのみで、珍しい景色を楽しみながらスルメとビールでワイワイやっておりました。こちらもテレビで見た通りにスルメを買ってストーブで焼いてもらい、舌鼓をうっておりましたが、朗志君はべっぴんの案内のお姉さんにしきりと話しかけていましたが、ついにナンパはできなかったようです。

昭和５年に開業してより走っている木製内装の客車にダルマストーブをつけた現在４代目の列車は、車窓から真っ白の雪景色の眺めるノスタルジックなストーブ列車でありました。いよいよ金木駅に到着し、太宰治の生家、斜陽館へ。生まれ育った家は、このあたりの大地主の家というだけあってとてつもなく大きい館でありました。太宰自身が『風情も何も無い、ただ大きいのである。』と書いている家でありました。すぐ近くにある津軽三味線会館では三味線の演奏会があり、そちらも合わせて鑑賞することが出来ました。

さて、そろそろ弘前へ向かわなければなりません。駅前で夕食をとり、普通の列車に乗り、夜行バスに乗るために弘前へ。また１２時間かけて東京へ雪の中をひたすらバスは高速道路の上を走り続けます。帰りはだんだん雪がなくなって行き仙台を抜ける頃には路面から雪は消え予定通りにバスタ新宿に到着とあいなりました。ということで終わってみますと、最初の計画どうり**往復夜行バス、ホテル泊なし**の雪中行軍と相成りまして、６円の飛行機に

は乗れず、ドタバタした結果、当初の計画どおりという、お粗末様でございました。**おあとがよろしいようで・・・・・・。**　　**沖井　孝志　(S49 卒)**

『2020 年　東京オリンピックと市大落研 50 周年に向けて』

① 入部のきっかけ

そもそも、私が入部したきっかけは　当時の漫才ブームもありお笑い好きなことも手伝って

「どんな人が情宣してるのかな？」「とんでもない個性的な人間の集団だったらどうしよう」と考えながら恐る恐る情宣している部員の方とお会いすると　その方が豊前田の花電車にご乗車された飲乱さんでした。今は市役所の職員の方ですから見た目で安心して入部しました。ちなみに、私の芸名は**花見亭　勧白(かんぱく)！**

② 入部して

初めてのお酒が北九州大学の新歓寄席でした。太空さんに連れられて撃沈したのを覚えてます。角輝さんと熊本大学にどぶろくさんや楽遊さんと福岡教育大学の寄席に連れて行っていただき次第にお酒も強くなっていきました。部員としては 1 年生の時は通学の電車が同じだった七魅さんと当時の国鉄の列車内で乗客の前で練習しながら帰るほどまじめな部員だったんですよ。そんなこんなであっという間に 1 年が過ぎ 3 月に十八番さん、「短命」のけん笑さん、「骨つり」の扇太郎さん、雪姫さん、喜八さん、「姫のあやまち」の鶴丸さん、壱久さんなど個性的な師匠連を送り出し翌年、喜六、八十六、初恋、東風と 4 人の新入部員を迎えました。年末年始は今は無き「広島鉄道管理局下関分局」で 6 回バイトして卒業を迎えました。

③ 卒業してから

落研の 10 周年に入学し 15 周年に卒業し、不動産とゴルフ場とホテル・旅館を運営する会社でバブルを経験し　岡山、新大阪、南紀白浜温泉、東京浜松町と転勤し福島の郡山に転勤したときに会社の都合で退職しました。(この時に細井さんから心温まるお電話いただきありがとうございました。)

元々、ミーハーな性格でしたので東京のホテルで働こうと思い都内ホテルの募集を探しなんとか働きはじめました。現在は、大阪のホテルの系列店なので以前勤務していたビジネスホテルとは違ったお客様のご利用が多いです。もちろん、英語をはじめ語学力のない人間ですから専ら日本人と日本語を話せる外国人の方とのお仕事がメインです。(笑)

東京オリンピックに向けて都内はインフラの整備が進みあふれんばかりの人をホームからこぼれないようにするためのホームドアの設置も進みいろいろなイベントも増えてきました。

皇室をはじめ小池都知事や国会議員の方もホテルへご来館される機会が多くなったように感じます。落研も 2020 年に 50 周年を迎えます。下関が選挙区でもある安倍首相をお迎

えしご挨拶いただけるようにしたいですよね。
まだまだ書ききれませんが続きはOB会でお会いした時にお話しさせてください。
最後にお詫びと感謝で。　笑司さんには岡山でいろいろとお世話になったり　また、いろいろと申し訳ございませんでした。　金艶さんと好志さんにもご迷惑をおかけしていろいろと申し訳ございませんでした。　楽狂さんには沼隈落語会でお世話になりました。
また、前の会社が倒産したときはご心配をおかけいたしました。軽連君には家庭教師を引き継いでもらいありがとうございました。そしてもうひとつの「ごめんなさい」は皆さんにお会いした時ということで。

汐菊寮での落研忘年会

濱元　龍太郎　(S61 卒)

『同窓会　福岡県支部　山下支部長さんからのお便り』

昨年今年（こぞことし）　貫く棒の　如きもの（虚子）
（昨年は昨年　今年は今年　別の年ではなく　昨年も今年も大きく繋がっているものだ）

同窓生の皆さま、あけましておめでとうございます。**福岡県支部長を務めております山下光彦です（17 期：硬式庭球部）**この度、編集長の西川様より落語についての執筆の依頼がありました。私、文章を書くのが非常に苦手ですと断っていましたが、「スッポンの西川（私が勝手につけたあだ名）ににらまれたら最後、しつこくメールや電話にて促され遂に「下手な文章でよければ」と渋々引き受けてしましました。つきましては「落語と私」ということで簡単に書いてみました。よろしくお願いします。

（落語と私）

数年前ですが、落語家の立川談志が亡くなったときの翌日の朝日新聞の天声人語だったと思いますが、『談志の「芝浜」はものすごかった。観客は演目が終わっても動かず、談志が去った後の座布団をじっとのぞきこんでいた』とかいうような記事を読み、談志の落語はそんなにすごかったのか？それなら、一度聞いてみたいものだと思い、さっそく談志の「芝浜」の CD を購入しました。

しかし、悲いかな落研の皆さまほどにユーモアが理解できない私。それほどの感銘を受けることはなくその後は、落語に接することはほとんどありませんでした。

このようなとき偶然、ネットで評判の島地勝彦氏（元週刊プレイボーイ編集長）が連載している「乗り移り人生相談」という人気のコラムを目にしたのです。

内容は、男女の交際等をめぐる様々な読者の悩みに対し、エロチックに面白く島地氏が回答するものです。

毎週、この連載を読むにつれ、ウイットに富んだ面白い回答にいつも感心するとともに「乗り移り人生相談」の大ファンとなってしまいました。

そして、毎回楽しみながら読んでいると、人生相談の回答のなかでしばしば落語の話がでてくるのです。当然話のストーリーがわからないと、その面白い回答も満足できません。

それで、話が出てくるたびに内容を調べるようにしたのです。そして、いつのまにか色々な落語を知るようになり、面白さも徐々に分かってまいりました。最近では 10 数枚の CD を購入するとともに、古典落語の本も読んだりしております。

いまでは、会社の懇親会等で世間話の合間に落語のネタを入れ込み、皆の受けをとれればなどと考えております。

「乗り移り人生相談」で紹介された演目は「長屋の花見」「井戸の茶碗」「富久」「親子酒」「文七元結」等がありました。

私が好きな落語はもちろん「文七元結（圓楽）」です。この演目は登場人物も多く、話も長いため長時間聞いておれるかなと心配していましたが、話のテンポもよく分かりやすく、最後はあわて者の文七と親孝行もののお久がめでたく結ばれたときは、しみじみ面白かったと感じたものでした。

もし今、私のこの文章を読まれている落研以外の方がおられたら是非聞いてみてください。お勧めの演目です。

まだまだ、初心者の私ですがもっと勉強し皆さまの話し相手になれればと思っております。次回、同窓会でお会いした折は是非声をかけてください。

楽しみにお待ちしております。　　山下　光彦　（S 57 卒）

『落研部室突撃インタビュー』

師走に入り、編集局からお尻を叩かれて、市大落研訪問してきました。
最初は、なんか敷居が高くて、、、入口の警備の方も「OB です！」って言っても感じ悪いし。事務局に行っても、こちらの電話番号を知らせて学生にきちんと伝えてくれたかたどうかわからなかったし、昔みたいに　気軽にヒョイと部室に行く、、、ってことができないご時世になってしまったので気が重かったです。

しかし、二回目は全く違ってました！始めに事務局に電話したら、翌日には部長から返信電話があり、登録したらラインで繋がりました。すぐ、翌日(今日ですが)訪問ＯＫで、話を聞くことができました。
入口の警備の方もフレンドリーで「どこでも空いてるとこ車停めて！」って言われて　気持

ちが楽になりました。
　そして今回は、大変スムーズに　現在の落研部員と連絡がつき、部室に行って写真を撮ることもできました。添付しております写真をご覧ください。

左の男子；１年　大倉裕人(おおくらゆうと)君　　あばら家扇太(ファンタ)・・・ドリンクのファンタです。

真ん中の男子；２年部長　松本慶吾くん(まつもとけいご)　春好亭　叫(ホェール)

右の女子；２年　中野祐希(なかのゆうき)　花見亭合法(ハーブ)・・・脱法ハーブと掛けてるとか。

３人とも　とても気持ちの良い　賢そうな学生で　私は先輩とはいえ、自分達の婆ちゃんくらいなのに　訪問に快く対応してくれて嬉しかったです。
部室が汚くて、としきりに恐縮してましたが、あの時代の部室に比べれは　月とスッポンめちゃめちゃ綺麗でした。
　部室の名前札も健在です。ただ、晋平さんの札が無かった(:_;)・・・何とかしなければなりません💦

◆現在の部員数
　　１年　男子４名　女子１名
　　２年　男子３名　女子４名
　　３年は引退

◆年間活動
　　５月末・・・新歓寄席
　　７月第２週・・・納涼寄席
　　10 月第１週・・・馬関寄席
　　2018 年１月 20 日(土)・・・追い出し寄席(場所未定　予定としたら山の田北部公民館 or 市大談話室　13:30 開場～)

以上です。長く続けてくれて、嬉しいですね。

皆様　下関にお寄りの際は　ぜひ　落研部室を訪ねてみてください。現部員も楽しみに待っていると思いますよ(^^♪?)　　**『かわら版』長府駐在員 千葉　里美　(S53 卒)**

『編集後記』

2012 年に久しぶりに川棚温泉で同窓会が開かれた。これを機会に同年 7 月に OB・OG へのささやかな贈り物として、機関紙「かわら版」の発行を開始した。継続は力なり、と言われるが毎年 1 月・7 月の発行は欠かさず行ってきた。そして、今年は私の地元大阪で、「OB・OG 会」が 5 月 12(土)～13 日(日)に開催される。これもまた予定通りである。

吹けば飛ぶような研究会から始まった落語研究会であったが、当時、教えを乞うた佐賀大学や熊本大学の落研は既に消滅している。大学同窓会においては大学そのものが、各クラブ OB・OG 会にとってはクラブそのものが、まずは存在していることが生命線である。

11 月の全国支部長会議(総会)の席上、荻野理事長や砂原事務局長が「少子化、公立大学の増加、学生の確保」に対し、母校の先を見据えた対応の必要性を述べられている。HP にアップされている同窓会の記事を読んでいるだけでも、友人になりたいと思う人に出会うことができる。

島根支部事務局の藤江　基(11 期卒)氏や福岡県支部長の山下　光彦(17 期卒)氏は少し「野心的な目標」を持って各地区の同窓会活動を推進されている興味深い人たちだ。メールのやり取りをして気づいた両人の共通点がある。住んでいる場所、性別、年齢の異なった同窓生に「あの手この手」を繰り出し、何とか「末広がり」の支部を目指そうとされているのがそれだ。私は頭の下がる思いがするので、「余り一人でやりすぎないようにしてください! 後に続く人がいなくなりますよ!」とお願いしている次第である。

維新の原動力となった「薩摩」や「長州」のように、「島根」や「福岡」が横断的にスクラムを組み「新たな時代の同窓会」を動かす原動力になれは楽しい!

日々、努力を積み重ねている人の言動や行いこそ、より多くの人の共鳴と協力を得ることができるという事実をお伝えして今年最初の編集後記とさせていただきます。

(編集局)